

荻原次晴さん（スポーツコメンテーター）

群馬県草津町出身。双子の兄・健司さんとともに小学校時代にスキージャンプを始め、中学からスキーノルディック複合に転向。兄弟そろって早大に進学したが、兄が早くから結果を出したのに対して、弟が芽を出したのは卒業後の1995年。全日本選手権で3位に入り、ワールドカップでは兄との兄弟ワン・ツー・フィニッシュを2度（いずれも準優勝）達成し、それまで日本ではあまり注目を浴びることがなかったノルディックスキーを世に広めた。その年の世界選手権の団体戦メンバーとして金メダルを獲得、98年の長野冬季オリンピックでは日本代表として個人6位、団体5位で入賞を果たした。数々の金メダルを手にした兄とは対照的に、明るいキャラクターでTVコメンテーターとして、スポーツ解説者として活躍。ランニングにも挑戦しているが、大の山好きとしても知られ、2011年からは「次晴『登山部』」を立ち上げ、仲間を募って全国100名山登頂を続けている。

<スキーは自転車と同じ>

映画『私をスキーに連れてって』がヒットしたのが1987年でした。私たち兄弟は17歳で、スキーブーム到来に驚いたものです。次に92年から93年あたりにもブームがあり、どこのスキーロッジも人で溢れていました。当時は何もしなくてもお客さんがやってきましたが、波が引いたら来なくなってしまった。考えてみれば当たり前の話で、当時からリフトの円滑な運営、食事の工夫などを考えていたスキー場があり、そういうところはいまでも賑わっています。最近アウトドアの楽しさを知った“連れてって世代”が子供を連れて来るケースが多くなりました。

問題はその後の時代で、スキーに限らず、外で遊ばなかった世代がじわじわと増えてきています。兄の健二はジュニアの育成、競技力向上に取り組んでいますが、兄弟そろって同じことをするのも面白くないだろうと、私は一般の方とアウトドアスポーツを楽しむ、“遊びのリーダー”になってやろうと色々取り組んできました。スキーは自転車と同じで、一度覚えてしまえば、仮に10年、20年のブランクがあっても再開できるものです。子供の頃に覚えるのが良いのですが、高齢スキーヤーが意外に多いのはもう一つ理由があります。猪谷千春さんのお父さんの六合雄（くにお）さんが80歳でイタリアで3000mの大滑降をして話題になりました。大変そうですが、それほどでもない。スキーは重力ですから、転ばなければ黙って下に降りていく道理です。

一方、日本では平地でスキーをするというイメージがなかなか湧かないのですが、それでも、少しずつノルディックスキーの愛好家が増えているのは、体を動かす楽しみが求められているからですが、ここ10年のマラソンブームに通じるものを感じます。福島県のイベントでの経験ですが、結氷した、広々とした湖の上をスキーで一周する解放感は素晴らしかった……都会生活で縮こまった肉体が、自然の中で大喜びしている感じでした。

社会がロボット化していく中、身体は動かさなければ確実に退化し、肉体はますます「もっと動いてくれ」と主張します。その声に応えるのがこれからの「健康」ではないでしょうか。私は父によく山に連れて行かれて山好きになり、8年前に『次晴登山部』を作って少人数で日本百名山踏破を始めました。現在72座までできました。日本人は忙しく、スポーツに馴染めなかった人が大勢います。これからも「楽しかった」という時間を共有する健康パートナーを目指します。